

Aquece Rio – International Sailing Regatta 2015（リオ五輪テストイベント）報告

2015年8月25日

ルール委員会

増田 開

2015年8月13日～22日にブラジル・リオで開催された見出しの大会に Intl. Jury メンバとして参加してまいりましたので報告いたします。

大会概要

リオ五輪が予定されている会場・海面で開催された。すべてのオリンピック・クラスのイベントが実施された。ISAF World Cup では同時に実施されるパラリンピック・クラスは、今大会では実施されない。

参加艇数は、Laser Std.が凡そ40艇、Laser Radial と RS:X Men が凡そ30艇、その他のクラスは凡そ20艇。詳細は ISAF WEB のリオ五輪のページを確認されたい：

<http://www.sailing.org/olympics/rio2016/results/index.php>



湾内のレース海面から見たコルコバードの丘。赤丸の山頂に有名なキリスト像が見えた

ITO の受入体勢

空港に着いてカスタムを出ると、名前の書かれたボードを持った人が待っていてくれた。同時刻に到着した4名の ITO が殆ど待つこと無くバンに同乗してホテルへ。ホテルまでは

約 30 分。帰りは私 1 名だったが、ホテルまで車が迎えに着てくれた。

ホテルは、ガイドブックによれば「中級」の IBIS ホテル (<http://www.ibis.com/gb/hotel-5691-ibis-rio-de-janeiro-santos-dumont/index.shtml>)。1 名/室で、私の部屋はクイーンベッド 1 台だった。部屋には冷蔵庫とセーフボックスがあった。バスタブは無くシャワーブースのみ。ランドリーサービスがあったので助かった。

最終日はレイトチェックアウトが手配されていて、レース終了後にホテルでシャワーを浴びてからチェックアウトできた。この配慮は有り難かった。他のジャッジにも、それぞれの帰国便の時間に合わせて、レイトチェックアウトが手配されていたようだった。

ホテルと会場との間は徒歩で 20-30 分の距離。朝と夕方はシャトルが 10 分間隔で運行されていて、殆ど待つこと無く乗れた。シャトルに乗れば 5-10 分。ITO 専用のシャトルで、ITO のテントの目の前からホテルの玄関まで送迎してくれた。

朝食はホテル。昼食は、海上に出る場合はランチボックス（サンドイッチ、フルーツ、チョコバーみたいなもの、菓子パン、オレンジジュース）。陸上勤務の場合には、会場の食堂で昼食をとる。

夕食は各自で、30 ポンド（約 5,600 円）/日の夕食代・日当が出た。ホテルのレストランで食べ過ぎ・飲み過ぎでも 100 レアル（約 3,300 円）もあれば十分だったので、相当余ったはずだ。どのくらい余ったかは分からない。というのも、プリペイド・カードみたいなもので支給されたからだ。クレジットカード (VISA) と同じように使える。余ったら ATM で現金化できるという説明だったが・・・昼間は会場にいたので現金化できないまま日本に持ち帰った。日本では使えないし、現金化もできない。来年またブラジルに持って行けば使えるらしい。ホスト側としては現金を扱う必要がないので良いのだろうが、銀行に行く暇が無い ITO としては現金でもらえる方が有り難かった。

期間中、ISAF 主催の夕食会が 1 回、地元ホストの主催するレセプション・パーティが 1 回、催された。

海水の汚染の状況など

日本でも新聞報道等でリオの海の水質汚染の問題や、レース海面に浮遊するゴミの問題が取り上げられていたので覚悟して臨んだ。具体的には、サンダルで十分な暑さだがブーツ持参。あとは消毒ジェルと抗菌目薬。

ゴミの浮遊は気になるほどではなかった。多く浮いているのはビニール袋。7 日間レース海面にいて 1 度だけスクリューに巻き込んだ。私の行かなかった湾の一番奥まったところにあるレース海面に最も多くのゴミが浮いていたようで、可能な場合にはこのレース海面の使用は回避された。

レース海面の浮遊ゴミ調査のために派遣されてきたという専門家のポルトガル人と夕食で一緒になった。期間中一度だけ夕立があって、雨による流入ゴミの状況調査のために翌朝ヘリで飛び回るとのことだった。会場となっている湾には 50 を越える河川が流れ込んでいるらしい。

初日に Medical ドクターがジュリー-MTG に来てくれて、汚染水に対する注意点を説明してくれた。6 海面のうちの 3 海面が湾内にあり、この湾内の水質汚染が心配されたが、現時点で WHO の基準（菌の数/cc）はクリアしているらしい。湾内にはイルカも泳いでいた。最も危険なのはハーバー内。ハーバー内の海水は毒々しい色でかなり臭った。ドクターによれば、手足に傷があったとしても汚染水で濡れても問題ないらしい（それでもブーツは

履いた)。最も危険なのはジュリーボート上でとるランチ。手には菌が必ず付いているので、ジュースのストローには触れるな、サンドウィッチにも触れるな、ペットボトルの飲み口にも触れるな、とのアドバイスに従った。ランチボックスには消毒用ジェルが入っていた。

ドクターによれば、一般に若いほど弱いそうで、オフィシャルズよりも選手の方が心配とのこと。オフィシャルズの中でも特にジャッジは色んな国を経験している人種なので菌には最も強いはず、だそうだ。ジャッジの中には体調不良などは無かった。選手やオフィシャルズを対象に、期間中の行動と下痢の有無などのアンケート調査が実施された。

初日のレース後、ハーバー内の汚染水に浮いてジュリーボートの給油を待つこと1時間。タイミングが悪くて酷い目に遭ったと思って、夕食の時に他のジャッジに話したら、おまえはラッキーだ、我々は3時間待ったとのこと... 水質汚染への配慮のため、一定数のボートをオイルフェンスで囲ってから給油開始、全艇給油した後にオイルフェンスを解除してボートをリリース、というプロセスなので当然時間がかかる。翌日から、ジュリーボートの給油はJury/Jury Secretary以外の誰かがやってくれることになった。

着衣の広告？

大会前日の最初のJury MTGにおいて、大会スポンサーとの関係で、大きなブランドマークの付いた服を着て海上・陸上をウロチョロしてはならない、とのお達しがあった。ブランドマークの無い/目立たない服は着ても構わないが、そういう服を持ってきていないなら、大会から支給された服(Tシャツ2枚、ウインブレ1着、雨カッパ上下1着)を着ている、とのこと。私の持参していたラッシュガードは、Tシャツで隠れない腕の部分に大きなロゴマークがあり不可と判断。着ることなく持ち帰るハメになった。

日本の国体における事情と似ているようだが、決定的に異なるのは、この広告制限？はオフィシャルズ側だけであって、選手に対しては一切の制限はない。ISAF 広告規定通り、選手の広告の権利は大会のスポンサーよりも優先される。

装備検査委員会 EIC

2014 ISAF Worlds Santander に続き今大会でも、Race Committee (RC)から独立したEquipment Inspection Committee (EIC)が設置された。

Santander のレポートと重複するが、ここで言う「独立」の意味を説明すると： 今大会のEICには艇を抗議する権利が与えられた。通常は、つまりRRSで定められていることは、計測において艇が計測規則等に従っていないと判断した場合、EICは、RCに書面で報告することが求められており(規則43.1(c), 78.3)、この報告を受け取ったRCは必ず当該艇を抗議しなければならない(規則60.2)。このような場合にRCには抗議するか否かの選択権は与えられておらず、EICが報告すればすなわち抗議がなされるので、EICが直接、艇を抗議する仕組みは極めて妥当だ。

Santander で初めて導入された仕組みで、その時のレポートに書いた通り、Santanderでは帆走指示書(SIs)に少し不備があった(具体的には、EICによる抗議の締切時刻が定められていなかった、など)。この問題は今大会では改善され、上の段落に挙げた関連規則もSIsで適切に変更されていた。

Jury チーム

リオ五輪のChairmanとvice Chairmanに決まっているBernardとJanが、今大会のChairmanとvice Chairman。彼らを含めて、23カ国から25名のジャッジが参加した。

日本からは1名（増田）。地元ブラジルの1名を除き、全員がIJ。

Jury セクレタリは4名。全員英語を話すが、とても堪能なのは2名。セクレタリのリーダー（Porto）は、ジャッジが足りなくなった終盤に1度だけ海面に出た。私が同乗して Laser Std.（規則 42 推進方法のワッチが極めて重要なクラス）に送り込まれたので、ジャッジとしても信頼されていたのだろう。ドライビングはやりたがらなかったため任せなかったが、規則 42 については良く分かっているようだった。

Jury メンバと Jury 内のタスクグループ（TG）のリストは下表の通り。全員がいずれかの TG に従事する。私は、Notice Board & Results TG のリーダー（と言っても私を含め2名の小さな TG）。

2015 RIO TEST EVENT			
INTERNATIONAL JURY			
	Name	Country	Task
BBO	BONNEAU Bernard	FRA	Chairman
JAS	STAGE Jan	DEN	Vice Chairman
PSC	SCHRUBB Peter	BER	MR Chief Umpire / Q&A
ADB	BAUDER Adrian	SUI	Results, Notice Board
SAB	BURNETT Sally	GBR	Schedule, Pairings/Q&A
ANS	SANCHEZ Ana	ESP	Jury Office, Hearings/ORIS
DDV	DE VRIES David	AHO	Equipment Inspection / Q&A
ALB	BASER Alan	GBR	Documents/ Q&A
ELD	ELDER Doug	NZL	Equipment Inspection
FRJ	JAUREGUI Francisco	MEX	Rule 42 Administration
GOH	HEREDIA Gonzalo	ARG	Vidéo, Tracking/Race Management
ISY	YOVKOVA Iskra	BUL	Rule 42 Administration
ROG	GUERRA Rodrigo	URU	Jury Equipment/ Q&A/ Windsurf rules
KAM	MASUDA Kai	JPN	Results, Notice Board
NAC	CHUBENKO Natalia	RUS	Jury Office, Hearings
NEB	BARAN Neven	CRO	Medal Race/ Video, Tracking
LYB	BEAL Lynne	CAN	Documents/Communication/Q&A
RSU	SUBNIRAN Rut	THA	Jury Office, Hearings/ ORIS
STW	WRIGLEY Stephen	USA	Q&A/Medal race
QCH	QU Chun	CHN	Race Management/Windsurf rules
COR	ORTENDAHL Christina	SWE	Jury Equipment/ Statistics
KLL	LAHME Klaus	GER	Race Management
LPS	STOEL Leo Peter	NED	Schedule, Pairings
JMA	MOSSIN ANDERSON Jacob	DEN	Vidéo, Tracking/ Rule 42 development
FCA	CALICH Francisco	BRA	Jury Equipment/ Local Advisor
EDU	PORTO Eduardo	BRA	Jury secretariat

※太字は前々日集合のコアメンバ

※太字は各タスクのリーダー

Course and Event Leaders / Back Up

Laser Std.	Klaus / Francisco J.
Laser Radial	Ana / Doug
470 M/W	Kai / Gonzalo
49er/49erFX	Alan / Lynne
RS:X M/W	Rodrigo / Natalia
Finn	Jacob / Iskra
Nacra	Peter / Neven

TG の割り当てとは別に、各クラスに海上におけるコース・リーダーが割り当てられた。私は 470 Men/Women のコース・リーダーに指名された。470 コース・サブリーダーの Gonzalo は、私より 3 年早く（2010 年）に IJ になった若い（若く見える）ジャッジで、2014 ISAF Worlds Santander では 470 のコース・リーダーを、2013 年/2015 年の 470 Worlds では Jury Chairman も務めている。

Gonzalo と大会で一緒になるのはこれで 3 回目。フレンドリーで、ジャッジ（私）に教えるのも上手で、江の島オリンピック・ウィークにチェアマンとして呼びたい IJ の一人だ。英語も聞き取り易い。ISAF の IJ sub-committee のメンバでもある。2016 年の 470 Worlds にも呼ばれたらしいが、選手として参加したいとのことで断ったそうだ。470 Worlds に向けて 40 kg 減を目標に減量中とのこと。

私を含む半数程度のジャッジは、大会最終日の前日までで帰途についた。最終日は 470 と Finn のメダルレースだけで審問も無いので、多くのジャッジは必要ないからだ。これは 2014 ISAF Worlds Santander などでも同様だった。2015 Weymouth ISAF World Cup では全メダルレースのドライバを任されていたので今回は最後まで残れるかと期待したが、帰された。今回は、470 のコース・リーダーであったため、他のクラスのメダルレースにも参加できなかった。

2014 ISAF Worlds Santander では、アセスメントフォームが配られ、ジャッジ同士が日々お互いを評価した。今回は、ISAF からオフィシャルズの評価のために 1 名派遣されていた。彼が監視する審問では、当事者に対し「この隅っこに座っている人は ISAF から派遣された人で、我々ジャッジを評価するためにここにいる。したがって、他のオブザーバーとは違って一時退出時にも退出しない」との説明がなされた。

規則 42(推進方法)

ペナルティーの数は、全クラス合計で約 60 件。そのうちの 11 件が 2 回目（リタイア）、2 件が 3 回目（リタイアした上で DNE）。クラス別では、Finn が 13 件、470 が 2 件、残りは Laser Std./Radial。私が担当した 470 では、男女合わせて 18 レースのうち、オスカー非適用のレースは 3 レースだった。期間中あまり風に恵まれなかった印象だが、行われたレースでは殆どオスカーが掲揚された（風速 8 ノット以上）。

ジュリーボートの配艇は Sally が決める。各クラスのコース・リーダーだけは各クラスにほぼ固定（例外が 1-2 日）だが、コース・サブリーダーを含む他のジャッジは日々担当クラスを変える。

毎朝、Jury 全体 MTG の後に、各クラスに分かれて MTG を行う。コース・リーダー以外は毎日異なるジャッジが来るので、特にそのクラス特有の見るべきポイントや注意点、ボート・ポジショニングのプランがコース・リーダーから説明される。その日のレースが終わると、また各クラス別の MTG。課したペナルティーや、同乗ジャッジ間で会話して合意しなかった（ペナルティーを課さなかった）場合の議論などを収集し、コース・リーダーは翌日以降にこれらを活かす。また、問題のあったコーチ・ボート（例えば定められた識別表示が無いなど）や、RC への提案（例えば、コーチ・ボートの待機エリアの設定位置など）の情報がコース・リーダーに集約され、Bernard に報告される。

ジャッジ毎に与えたペナルティーの数が日々集計される。つまり、ペナルティーの数が際だって少ない、あるいは、際だって多いジャッジがいないかがモニタされる。Yan は、どちらかと言うと、ペナルティーの数が少な過ぎるジャッジの存在を心配している話しぶりだった。つまり、十分な証拠を収集せずにペナルティーを課すジャッジが存在するとは思っていないが、証拠を収集する能力に大きな差があるのではと心配しているようだった。

審問パネルの構成

審問パネルは付則 N に従って 5 名で構成される。Hearing 担当の Ana が審問毎にパネルメンバを決定する。国体における事務局長のような役割だが、異なる点は、Ana 自身も海面にも出るし、パネルにも入る。

パネルメンバは、国体のように固定メンバではない。その日、海面に出なかったジャッジ、海面から早く帰ってきたジャッジで、インジケータを“available”にして待機しているジャッジが Ana に使われる。トイレに行くときは“available”インジケータを OFF にする。

最初の Jury MTG で、今大会とリオ五輪ではパネルチェアとスクライバは限られた数名の IJ の中から指名する、との説明があった。残念ながら私はこの「限られた数名」には入っていなかったらしい。アジアからのジャッジの中では、Rut と Natalia にはチェア／スクライバの機会が与えられていた。

Natalia は今年の江の島オリンピック・ウィークのチェアマンとして来てもらった私とほぼ同年代のジャッジ。Rut も何回か江の島オリンピック・ウィークに来てくれていて、今年も呼ぼうとしたが他の大会が重なっていたため実現しなかった。Rut と Natalia は、Jury Office/ Hearing TG に指名されていて Ana のサポートをしていた。

メダルレース当日の朝、メダルレースに出走する艇の計測が行われる。2014 ISAF Worlds Santander においては、そのレポートにも書いた通り、この朝の計測に来なかった艇がいた。当然 EIC がこれらの艇を抗議して審問が行われる（DPI 対象）。メダルレースにおいては、レース終了時点で直ちにメダルが確定することが大切なので、このような審問は出艇前に大急ぎで行う必要がある。Santander での経験があったので、このような「朝の審問」に対応するパネルが用意された。案の定（？）、今大会も計測に来ない艇がいて、DPI (30% =6pts) が課された。

審問

抗議、救済要求、審問再開要求の件数は、全クラス合計で 38 件。ISAF Worlds や World Cup と比べると少ない。

全ての審問の判決文は、ISAF WEB のリオ五輪のページで見ることができる。これらの

判決文は、今大会に召集された IJ の中でも「限られた数名の IJ」がチェア／スクライブした判決文に、さらに Ana のチェックが入った上で、WEB に掲載されたものだ。IJ を目指す NJ にとっては格好の教科書になるだろう。

パネルメンバ間で意見が割れるような興味深いケースもあったが、今大会は来年のリオ五輪に直結しているのでオフィシャルズ内部の議論は閉会後も（たぶん五輪の閉会まで？）漏らすなど釘をさされたので、残念ながらここでは議論の内容は紹介できない。いずれ「ある大会」での出来事という形で別途紹介したい。

公式掲示板 と Standard Penalty

大変勉強になる失敗をしでかしたので経緯を含めて報告したいところだが、これも今回は明かすことができない。以下には、周知の事実と学んだ結論だけを紹介する。

Standard Penalty（得点記録は STP であった）とは、艇の規則違反に対して審問を経ずにレース委員会が課すことができると SIs に定められているペナルティーのこと。出艇申告違反に対する PTP などは国内でも一般的だが、他にも、トラッキング・デバイスを決められた時間に取りに／返しに来なかった、SI の規定通りにセール上の国旗表示をしていなかった、などの違反も Standard Penalty の対象とされた。共通することは、審問を行うまでも無く、RC による観察だけで議論の余地無く判明する違反が STP の対象とされる。

STP 対象の各種違反に対する具体的な得点ペナルティーは、SIs の中には無く、公式掲示板に一覧が掲示された（この一覧が掲示されることは SIs に規定されている）。RC が予め決めたこれらの STP が適切ではないと RC が判断した場合には、RC は艇を抗議することも選択できる。その場合には Jury による DPI の対象になる。

RC が STP を課した艇のリストは、SIs の規定により、公式掲示板に掲示されることになっていた。Jury による規則 42 違反に対する付則 P のペナルティーと同様に、

RS:X Men JPN の 2 日目の第 4 レース、及び、3 日目の第 5,6 レース（合計 3 レース）に STP が課された（各 1 ポイント）。違反の内容は、セール上の国旗表示違反。

不審な点は、2 日間に亘ってこの違反が続いたことだ。日本の国旗はとてもシンプルで簡単に手作りできそうなのに、なぜ第 4 レースに STP を受けた時点で翌日までに正しく貼り直さなかったのか？

RC 及び Notice Board/Results TG 担当であった私自身の失敗が関係しているかもしれない。関係していたかどうか真偽は分からない（隠すのでは無く、本当に知らない）。詳細は明かせないが、要するに、SIs に規定されていた STP 艇リストの掲示が遅かった（これは周知の事実）。もっとも、SIs には「いつまでに掲示する」とは規定されていなかったが、望ましいタイミングからは大幅に遅れて掲示された。この出来事から学んだ大事な結論は：

- ① RC による STP 艇リストの掲示は、とても Urgent で不可欠。

Jury による規則 42 違反艇リストの掲示よりもずっと大切である。なぜなら、STP 艇リストの掲示が行われないと、当該艇はペナルティーを課されたことを知ることができない。違反したことに気付かない可能性もあり、したがって翌日も同じ違反を繰り返す（継続する）可能性がある。

このため、RC による掲示のタイミングが一貫しないことは、場合によっては公平性にも影響するかもしれない。

- ② Jury の Notice Board/Results 系の役割はとても大切。

今大会のように WEB と紙の二重の公式掲示板がある場合には、両方の掲示が一致しているかどうかチェックしなければならない（この「二重化掲示板」によるトラブルは 2015 ISAF World Cup Weymouth でもあって、JSAF ルール委員会には報告を配信済み）。

もちろん、このようなオフィシャルズ側の失敗が関係していたとしても、当該艇が違反を強いられたわけでは無い。自艇の違反に気付くチャンスの一部を奪われただけであって、当該艇に own fault があったことには変わらないので、救済が与えられる可能性はない。だからといって、あるいは、だからこそ、このような失敗はよろしくない。

リオ五輪への Jury Secretary メンバ派遣の可能性

東京五輪において、Jury に関して JSAF が準備すべき部分は Jury Secretary だ。Jury メンバは基本的に 1 名/国だが、Jury Secretary は全員が開催国のメンバで構成される。

Jury Chairman の Bernard に、来年のリオ五輪への日本からの Jury Secretary メンバの派遣を受入可能か聞いてみたところ、Bernard としては受入可能とのことで、希望するなら JSAF から Technical Delegate にコンタクトしてみてもどうか、とのことだった。次の五輪の準備のために、visit を受け入れることはあるが、secretary メンバの派遣を受け入れた前例は知らないとのこと。いずれにしても派遣費用は JSAF 側が負担することが前提。

Jury メンバとして参加していても、Proto をリーダーとする Jury Secretary メンバが何をどのように分担して実行しているのか、Bernard や Ana とどのような連携をしているのか、どのような準備をして臨んだのかなどは見えてこない。インタビューしようにも、Porto も終始忙しそうだし、私自身も自分のタスクで手一杯で困難。リオ五輪の Jury Secretary にメンバを派遣して Secretary に貢献もしながら調査するというのが、東京五輪に向けた準備としては最善の方法だろう。

以上